

Title	明治後期竣工の幼稚園舎二棟の建築と教育に見る地域力 : 愛珠幼稚園(大阪市)と旭東幼稚園(岡山市)
Author(s)	永井, 理恵子
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume23 : 113-122
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2826
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

明治後期竣工の幼稚園舎二棟の建築と教育に見る地域力

〈愛珠幼稚園（大阪市）と旭東幼稚園（岡山市）〉

永井 理恵子

はじめに

日本の幼稚園教育は、明治五（一八七二）年頒布の「学制」において、小学校の一つとして「幼稚小学」が定められたところに、その制度的誕生を見る。すなわち、初等教育が「小学校」として一本化されたのと同時に、幼稚園もその新しい教育システムの一端に位置づけられた。そして近代学校誕生の一貫としてスタートした幼稚園教育実践の内容と方法は、モデル園として設立された東京女子師範学校附属幼稚園（明治九年開設）において具体化され、これは明治と昭和戦前期の日本の幼稚園教育実践の一つの手法として長く影響し続けることとなる。

上記のように、学制頒布と同時に学校制度の中に位置づけられた幼稚園であったが、その普及は小学校に比べて大きく遅れていた。近代化において西欧諸国に大きく遅れをとっていた日本の状況を問題とした政府は、遅れを取り戻すべく公教育の徹底に力を注ぎ、師範学校の設立、師範の養成に急いだ。近世においては社会的身分によって分かれていた集団教育の場が、明治近代になって一本化され、人々は誰もが学校に通えるようになることを喜び、

学校の設立に地域を挙げて協力し、物心共に多くを注いで小学校の普及に取り組んだのであった。

それに比して幼稚園の普及は、全く芳しくなかった。そもそも幼稚園とは何をするところであるかも明確ではなく、人々は戸惑った。学制頒布の明治五年以降、数年を経ても継続して運営される幼稚園は出現せず、政府は大いに悩むところとなる。もつとも、明治八年開設の桜井女学校附属幼稚園など、築地や横浜には外国人宣教師による幼稚園の開設も僅かながら見られたのであるが、それは日本全体を牽引する数には全く不十分であったと共に、その実践内容・方法ともに宗教色の強いものや海外のスタイルをそのまま導入したものなどで占められ、一般社会への普及には程遠い状況だったのである。

頭を抱えた文部省は、官立の幼稚園の設立に乗り出す。そうして開設されたのが、先に述べた東京女子師範学校附属幼稚園であった。その後、少しずつ幼稚園の数は増えていったが、明治十年代前半まではその多くが全国各地の師範学校附属であった。当時の幼稚園のモデルとなった東京女子師範学校附属幼稚園における教育の内容・方法は非常に特異なもので、道具も特別なものを使用して実践されていたため、それを模して広まった当時の幼稚園は、潤沢な資金がないと開設できないと考えられていたのであった。

しかし、そのような状況の中にあつて、明治十年代後半になると、一般の人々や地域の中で、幼稚園を開設しようとする動きが開始された。その契機は個々に異なるが、小学校と比べて開設の遅れていた幼稚園にあつても、その開設を指そうとする地域の人々がいたのであつた。小学校の設立も含めて、明治前期の近代学校の誕生と拡大・普及においては、地域の人々の力は絶対的に不可欠であつた。我が国の近代教育は文部省によつてではなく、地域力によつて曙光を見ることができたと言つても過言ではない。そして、その地域の人々の熱意を具現化し、視覚的に示し、そして今日に至るまでその姿を確かに確認できるものに、小学校舎、幼稚園舎がある。それらは地域の

人々の夢や願いを映し、当時の教育内容・方法を垣間見せるものとして、研究対象として大きな魅力に溢れたものである。

近代学校建築は、初等教育機関から高等教育機関にまで多くのものが建てられ、その一部は今日も遺されている。それらのいずれもが魅力的であり、紹介したい事例も多くあるのであるが、今回はそれらの中から、二つの幼稚園舎を紹介したい。これらの園舎は二〇〇七年六月、我が国の幼稚園舎として初めて、国の重要文化財指定を受けたばかりのものである。いずれも築百年、今まで幼稚園舎が僅か一棟さえも国指定重要文化財に選定されていなかったという事実にも改めて驚かされたが、とにもこうして、今まで教育史あるいは建築史研究の俎上にものぼらなかった幼稚園舎の価値が公的に認められたことは非常に喜ばしい。今、改めて問われている地域力。この二棟の事例の中に、我が国に確かに存在した大きな地域力を見たいと思う。

一、愛珠幼稚園園舎 —— 幼児の育ちを支え続けて一〇七年 ——

銀行や保険会社の高層ビルが建ち並ぶ今橋、著名な製菓会社の看板が連なる道修町などのある大阪市の旧北船場地域に、今回、幼稚園舎として初めて、国の重要文化財指定を受けた園舎の一つ、愛珠幼稚園舎がある。園舎の東側には適塾が隣接していて、現在は高層ビル群に囲まれている愛珠幼稚園舎と適塾であるが、園舎の重厚な迫力は周囲の近代ビルに引けを取らない存在感を醸し出す。この園舎は、愛珠幼稚園舎三代目のもので、明治三四（一九〇二）年に竣工した。爾来百年余にわたり、園舎は他の用途に使用されることなく継続的に幼児教育の現場として活用されてきた。戦禍を逃れ、地震に倒壊することもなく、一世紀を超える時間を幼児と共に過ごしてきた園舎は、

多くの関係者に愛され労られながら、明治後期の技術の粹を結集した姿を今に伝えている。木造建築の園舎が、百年の年月を超えて継続使用されることは極めて稀で、他に類を見ない。

愛珠幼稚園は、明治一三（一八八〇）年六月、かつて豪商であつた升屋家平右衛門・山片重明の自邸を北浜小学校舎として使用していた一角を借用して開園した。明治五（一八七二）年の学制において「幼稚小学」の名称により制度化された我が国の幼稚園は、その保育目的・内容・方法が明示されなかつたため普及が難しく、当初は官公立によつて設立が進められた。日本初の官立幼稚園であつた東京女子師範学校附属幼稚園（明治九年）、それに続いて鹿児島女子師範学校附属幼稚園と大阪府模範幼稚園（共に明治一二年）が設立された他、僅かのキリスト教宣教師による幼稚園が設立されていたに過ぎなかつた頃、明治一二年末に組織された大阪・北船場の二一町から成る連合町会は、小学校の普及に比して遅れている幼稚園の、全国に先駆けた開設を提議、一同は大いに賛成し、幼稚園の設立が決定した。開設に当たつては、当時の幼稚園教育において必要とされていたフレール恩物の購入など多大な経費がかかつたが、連合町会内には日銀大阪支店長、大阪商船会社発起人、大阪貯蓄銀行重役、塩野義製菓創業者の父などの有力者も多く在住し、多額の寄付を得た。その後、園児数増加により園舎は狭隘化、明治一六（一八八三）年に、同じく豪商であつた鴻池屋善右衛門持家を貸与され移転。しかし、この代用園舎も採光・換気条件の問題や、庭と室内との自由な往来が難しかったことなど保育の場としての問題は多く、新たに竣工したが、この明治三四年竣工園舎である。

園舎の基本設計は競技により、当時の主任保母であつた伏見柳の案が選ばれた。その原案を文部技師の久留正道（「学校建築設計要項」（一九〇四）作成者）の指導に通し、大阪府技手の中村竹松が設計を完成させた。ちなみに伏見の原図、中村の最終図面なども、全て現存している。原案作成者の伏見は保育実践経験が豊かで、愛珠幼稚園に

赴任して以来四年間にわたって近隣の幼稚園を訪問したり、幼稚園教育関係者との交流を広く持つたりしており、その幅広い知見を生かして園舎の基本設計をおこなった。約二八〇〇〇円という工費は地域の有力者の寄付により充当され、潤沢な地域の援助は園舎のみならず数々の教材・教具・遊具・備品などにも適用、それらの多くが現存する。

新築園舎の外観には和式意匠を採用。とりわけ「御殿造」という豪華なものである。明治三十年代、近隣の小学校舎は明治初期に建てられた擬洋風意匠による校舎の老朽化による新築ラッシュとなっていたが、明治二四（一八九一）年の「小学校設備準則」において学校舎の「質朴堅牢」が強調されたこともあり、この地域では最早、擬洋風意匠は導入されなかった。替わって多く導入されたのが御殿造であり、これは北船場近隣の町屋では明治後期になってもなお典型的であった瓦葺などの和式意匠を踏襲している。一方で園舎内部には、遊戯室の高い格天井と、その近くに設けられた大きな採光・換気窓、天井から下がるシャンデリアなど、洋風意匠を用いている。外装と内装のコントラストが魅力的だ。

平面計画も、保育実践に合わせて工夫された。明治三二（一八九九）年「小学校設備準則再改正」において常例とされた片側廊下は、この園舎においても採用されているものの、その方位は一定ではなく、全ての廊下が園庭に面するように設けられた。そしてその廊下は、保育室や園庭との段差がないよう設計されている。明治三十年代はフレイベル恩物中心主義からの脱却が図られ、机に向かって長時間にわたり恩物を使って過ごすのではなく、園舎内外、保育室・廊下・園庭を往き来しながら活動するようになっていたから、この園舎は機能面から見ても、当時の実践にそくした設計がなされている。保育室の廊下側および反対壁面にも大きな窓が設けられ、採光・換気にも充分な配慮がなされている。

愛珠幼稚園舎は、保育実践者が求めた機能性と、地域が求めた意匠的特徴を見事に融合させて造られた、名実共に我が国の代表的な学校建築の一つであることは疑いない。地域の人々の熱い思いによって造られ、大切に使用・保存されてきたこの園舎が今後いつそう多くの人々に愛され、さらに長くその姿を見せ続けてくれることを願うものである。

二、旧旭東幼稚園園舎 —— 瀟洒な美しさと機能性を併せもった梅鉢型 ——

岡山市内の清輝橋を過ぎ、市立中央図書館を目指して歩いていくと、その奥に薄紅色の一風変わった木造建築が見える。その独特の形状は通る人々の足を止め、開放的な窓や玄關扉は人々を中に誘う。内部に入ると、中央に、高い窓から光が射し込む広々とした遊戯室があり、そこから突出する三つの保育室が見える。この建築が、現在「八角園舎」と呼ばれ市民に親しまれている、旧旭東幼稚園舎である。

旭東幼稚園は明治一八（一八八五）年、岡山県師範学校附属小学校訓導の進藤貞範により、小橋町国清寺の境内に「私立川東幼稚保育場」として開設された。県師範学校幼稚科に次ぐ市内二番目の幼稚園の開設であった。明治二一（一八八八）年、地域の有力者二〇名と進藤は知事に届を提出、保育場は共立となつて小学校舎内に移転する。その後、市立と私立を往復し名称変更されつつも、園は地域の共同運営の形をとつて保育は継続され、明治二七（一八九四）年には小学校の敷地内に最初の新築園舎を竣工した。やがて小学校が合併、幼稚園は新しく誕生した旭東尋常小学校の附属となる。明治四一（一九〇八）年に園舎を新築し、旭東小学校附属幼稚園として運営を開始した。この園舎が、今回の国重要文化財指定を受けた建築である。

園舎の設計は、旭東尋常小学校舎の設計も手掛けた岡山県技手の江川三郎八である。江川は他にも、私立閑谷中学校本館（一九〇五・現存）、遷喬尋常高等小学校（一九〇七・現存、国重要文化財指定）、倉敷尋常小学校附属幼稚園（一九一五・現存）なども設計した。他にも相当数の建築を岡山県下に設計したにも関わらず、江川の経歴などは近年まで不明であったが、二〇〇一年に本人自筆の自伝が発掘され、その経歴も明らかとなった。江川は万延元（一八六〇）年、福島県会津の生まれで、福島にて設計の技術を学び、福島県技手を経て明治三五（一九〇二）年に岡山県技手に招かれた。大正一二（一九二三）年の退職まで、岡山県下に多くの建築を遺した。自伝によれば江川は、当時の日本の学校建築界を牽引していた山口半六、久留正道、三島通良の直接指導も受けている。

園舎の外部意匠は、下部は縦板張り、上部は下見板張りで、外壁上部には筋違を模した板を十文字に貼っている。屋根構造も洋式のトラスが採用された。一般にこの園舎の意匠は擬洋風とされているが、明治前期に出現したような装飾過多な擬洋風建築とは異なり小ざっぱりとしたデザインで、コロニアル式の洋風意匠と言っても良い。色は現在の復元園舎の外壁のような色に塗られていたと伝えられ、それに合わせて復元園舎を彩色した。江川の幼稚園教育に対する印象を表現した色彩だったのだろうか。窓は大きく、各保育室も壁面上部一杯まで窓、一段と高い屋根を持つ中央八角遊戯室には更に高い位置まで窓が設けられて内部空間の採光・換気に寄与しており、これは設計当時直近の学校建築に関する規則「学校建築設計要項」（一九〇四）における採光窓の基準を遥かに超える大きさであった。加えて、中央八角形遊戯室と、それに連結する各保育室の間仕切り引き戸もガラス障子窓が採用され園舎内の見通しを良くしており、開放的な内部空間が創造された。竣工当時の旭東幼稚園の保育は、明治前期から実践されていた「会集」（集会のような活動）、伝統的なフレールベル恩物活動に加えて、当時流行していた表情遊戯（皆で一斉に輪になって踊る活動）、共同遊戯（皆で協力して大型積木などを使って遊ぶ活動）、自由遊戯（各自で

自由に遊ぶ活動）なども盛んに行われたので、保育室でおこなう恩物活動と、遊戯室でおこなう会集や各種遊戯とをスムーズに繋げるに、この平面計画は有効だった。反面この園舎は、各保育室から直接に園庭へ出ることは出来ず、園舎外部に出るためには必ず中央遊戯室を経由する不便さを持っていた。この点について各種の先行研究は、幼児を常に保姆の監督下に置き、怪我などのないようにしたと分析する。

長く活用されてきた園舎であったが、昭和三八（一九六三）年には危険園舎指定を受けたと共に、戸外遊びの重視に伴い保育室と園庭を自由に移動できる園舎が求められるようになり、加えて遊戯室と保育室を離れた静動分離も期待されるようになって、園舎は戦後の新しい保育理念や実践形態に適合しにくくなってきた。昭和五一（一九七六）年に結成された旭東幼稚園改築促進期成会の他、建築士会、学区連合町内会、学区婦人会などが市に要望を出し続けた結果、移転保存は決定したが、移転先の決まらぬまま昭和五四（一九七九）年末に解体された。その後、長い倉庫保存を経、平成一〇（一九九八）年、約八〇〇〇万円をかけて現在地に復元された。史料保存のみになる危険性のあつた園舎を今に甦らせたのは、ひとえに園舎を愛する地域の人々の熱意なのである。

おわりに

今回、紹介した二つの園舎は、明治期の幼稚園舎で現存する僅かな棟の中の二棟であった。今回は幼稚園舎の事例を取り上げたが、地域の教育力の実態を知るには幼稚園舎に限らず、明治期の小学校舎の建設を取り巻く状況を見ても大変に興味深いものである。著名な明治期の学校建築として、長野県の開智学校（明治九年）、麻績学校（明治七年）、中込学校（明治八年）（他の県にも多くあり）なども、その史料を紐解くと、それらの学校の設立も校舎

の竣工も多大な地域の援助によって成立していたことが明らかなのである。

無論、明治期の学校設立に地域が深く関与していた背景には、国は学校設立を声高に叫びはしたものの経済的支援はおこなわなかったという現実があった。だからこそ、地域の力なくしては学校の設立も校舎の新築も叶うものではなかったのは確かである。とはいえ、各地域の人々は、自分たちの地域の教育のためならと、全戸が少しずつでも経費を拠出して援助した。この頃の学校舎は地域特産の資材を使用したり、地域の棟梁が外国人居留地の建築を見学して設計したりして建設されたため、その地域色の豊かな、個性的なこのが多く建てられたのであった。

時代が下り、学校の設立と校舎の設計を国が全責任をもっておこなうようになって以降、地域の負担は軽減したものの、校舎の個性は失われ、地域性も見られなくなり、全国の学校教育の内容・方法、校舎の形態は画一化が進んだ。それは時代を下るに連れて一層顕著になり、戦後日本に至ると全ての校舎が全く同様の計画で建てられる時期もあつた。「校舎は、敷地面積と形状を電話で聞くだけで設計できる」とまで言われた時代もあつた。

そうした時代も過ぎ、現在は再び、校舎・園舎は個性化・個別化の時代に入っている。独特な意匠を持つ校舎や園舎を目にする機会も多くなった。

しかし、そこに、以前のような地域の力は再生されているのだろうか？ 筆者の見る多くの近年の校舎・園舎の姿には、地域力の粹として実現した校舎・園舎もあれば、そうでないものもある。どのようにして造られるかも含めて、個性化の時代に入ったように感じる。

幼稚園建築の歴史を紐解く研究が続けながら強く感じるのは、「モノ」を媒介にすることにより、人々の関係は深くなるができるということである。極めて具体的に目に見えるものを通すと、人々の議論は具体的かつ現実的になる。校舎・園舎の設計過程で、地域あるいは保護者集団との話し合いの場を多くもった学校・幼稚園・保育所

は、その後の学校運営の場に、人々を集めることが容易になる。皆、自分が関与した建築に愛着がわき、それがどのように活用・維持されているかを確認しないではいられない。

教育実践を語る時、おうおうにして教師・子どもといった人間関係・人的環境に議論は集中する。しかし、そればかりではなく、場を提供する教育施設の在り方を考究することもまた、教育実践研究に有効であると確信するものである。